

## 登山団体と「外」との接点

もう、ここまでくれば登山口までは近い。「ちょっと一本、立てましょうか」休んでいると、年輩の女性登山者が登ってきた。「ここからだ、大分かかりますよ。この時間なので、今からだと帰る頃には暗くなります。考えて登ってくださいね」リーダーのNさんが声をかけた。「はい、その辺まで行って引き返そうかと思ってます」「下のゲートが開くのが遅いんで、登りはじめの時間はみんなゆっくりなんです、ちょっとこの時間じゃあね。ほんとに僕らが帰る頃から登りだす人もけっこういるんですよ。先日も山頂に登ったけど、下れない、とSOS出してきたひともいましたし、ね。余分な事かもしれないけれど、こうやって一声かけるのも、登山団体に所属している僕らの存在意義のひとつだと思ってやってくるんですけどね。わりと気持ちよく聞いてもらえます」

先日、四国の石鎚山に登ったときのことだ。四国で最も人気の高い山には、老若男女、実にさまざまな人たちが訪れる。外国人も多い。安全のためにどんなことに気をつけるか、それらを不特定多数のひとたちに知ってもらったうえで、山に入ってもらおう、というのはそう簡単ではない。今回は、山岳団体と、その「外」の多くのひとたちとの「接点」について考えてみる。

# 私の登山

20

# ワタシと登山

半田ファミリー山の会代表  
洞井 孝雄

どんな山がやりたいんだ？

先日（またまた先日なのだが、これらはみな、ここ数週間のうちのできごとである）、私の所属する山岳会の登山講座で「下山の途中、他の登山者が登ってきた。すれ違いのときはどうします？」と受講者に聞いたら、「ザックを山側にしてよけるのだ、と、（実技で）教えてもらいました」という答えが返ってきた。

が、そういう教え方じゃなくて、「山側に立って道を譲る。その際、ザックを山側になるように立てば、登ってくるひとの邪魔にならない」という教え方をしてほしかったね。立ち止まって道を譲るのはルール、山側に立つのは、安全のための用心、ザックを山側に向けるのは、荷物がすれ違うひとの邪魔にならないようにする配慮だ。道を譲る「ルール」と



石鎚山で（天狗岳方面から弥山頂上を望む）

その「方法」、そして「マナー」の三つが含まれているわけだが、この教え方では、「方法」と「マナー」が短絡している。ザックを山側に、とだけ言えば、谷側に立ってザックだけ山側に向けて立つひとも出てきそうである。これだと、すれ違う際に、自分が谷底に落ちる危険もあるし、すれ違うひとにザックを向けて立つことになる。原則としては登ってくるひとには

### 富士山の悩み

これも先日の話。全国自然保護担当者会議で、富士山をフィールドに、清掃活動をはじめ環境保全、森林保全や教育、広報活動などに取り組んでいるNPOの報告を聞いた。今年（2015年）のシーズン中の登山者数は、箱根の噴火、マイカー規制によるバス代、協力金などでお金がかかるようになったことで、前年の約28万5千人から約23万4千人と減ったらしい。それでも一シーズンだけでこれだけの登山者が入山する。登山経験がなくても一度は登りたい山として富士山をめざすひとや習慣の違う外国人が増えた昨今、登山装備を買い揃えなくとも、頭のとっぺんから足の先まで一式がレンタルできてしまうので、よけい入山が手軽になったのだそう。準備がお手軽になった分、安全に対する意識、山の基本的な知識やルール、マナーを知らないままやってくるたくさんの方の入山者に、歩き方、トイレやゴミ問題、その他、登山する際に注意すべきことをどう伝えるか？と

道を譲ろう。その際、まず自分の安全を確保し、次いですれ違う人に配慮しようということだ。会員と、基本から登山を学ぼうという受講者との間ですら、こんな理解になっているから、不特定多数のひとたちに「登山の安全」がどのようなものか、注意事項が具体的にどういうことか、ルールやマナーを伝え、理解してもらおうのはそう簡単ではない。ましてや、登山団体は未（非）組織登山者の圧倒的多数だけではない。

く、外の世界との接点をほとんど持っていない。私たちは本当に狭い世界で活動しているのだ。まずそのことを自覚しつつ、今、心ある仲間が機会あるごとに、外の登山者に語りかけているような、山に登るひとなら誰でも低限知っていてほしい知識や技術をスタンダードとして確立させ、それらを、組織を超えてベースとして定着させていくことが急がれると思うのだが。

いうことが、かのNPOの悩みになっている、ということであった。一瞬、そうか、レンタルか、登山用品メーカーの陰謀か（失礼！）、などという思いが頭をよぎったが、私たちが意識すべきは、山岳団体が、圧倒的多数の未組織（非組織）登山者に知ってほしい情報や伝えたいことを周知する手段をいかに持っているかないか、ということだろう。山岳会や連盟の仲間うちなら、情報を周知することは機関紙や限られた相手への連絡だけで済む。でも、組織外に周知することはそう簡単ではない。思いつくのは新聞、雑誌、ポスター、チラシ、ホームページなどで情報を発信するか、限られた機会を得て口コミや訴えをしていくことくらいか。日程や対象が限られた行事などの周知はまだターゲットを絞って広報できるが、登山する際に守ってほしい注意事項や安全対策などを不特定多数のひとたちに伝えていくこととするのは、相当に大変なことではある。

小さな接点から  
スタンダードづくりを

### テルモス

メーカーの名前だが「保温水筒」の代名詞として使われている。山でテルモスといえば、象印だろうがタイガーだろうが関係なく、「魔法瓶」のことをさす。そろそろ山の気温が下がってくるとテルモスの出番がくる。容量が大きなのがやはり冷めにくい。最近は誰もかれも「山専」と呼ばれるコンパクトで軽いものを使っているようだが、私のそれは1982年にヨーロッパアルプスに行くときに購入した日本酸素製の750cc。中瓶がガラスからステンレスになった頃のもので、30年以上も使っているのに、いまだに保温力が高く重宝している。ただ、堅牢だが少し重い。ある会の周年のパーティーに招かれて、どんな流れか、私のテルモスの話になった。メーカーのOBがいて、「それ、私たちが作ったやつですよ」と誇らしげに言われたことがあった。紛れもなくメイドインジャパンの逸品だと思っている。